

の義を撰す。極無自性心・十縁生の句を説くが如きは、即ち花嚴・般若の種種の不思議の境界を撰して皆其の中に入る。如実知自心を一切種智と名くと説くが如きは、則ち仏性涅槃經一乘法花經如來秘藏大日經皆其の中に入る。種種の聖言に於て其の精要を統べざること無し」と。毘盧遮那經の疏傳教・弘法第七の下に云く、「天台の誦經は是れ円頓の教息なり」と謂う。是れ此の意なり。大宋の高僧傳卷の第二十七に、「代宗だいそう・玄宗げんそうの御の光こう含光くわんこうは不空三蔵ふくそうさんざうの弟子なり、天台第たいたい・禅觀ぜんくわんを解了げりようして深く智者ちやうぢやうの膏腴こうゆを得たり。嘗て江淮かうわいの僧四十人にんと清涼しやうりやうの境界きやうがいに入る。湛然たんねん、光こうと相見あひまて西域さいいき伝法の事を問う。光の云く、一国の僧、空宗を体解する有り。問うて智者の教法に及ぶ。梵僧の云く、曾つて聞く、此の教は邪正じやしやうを定め偏円へんえんを曉り、止觀を明かして功第一に推すと。再三光に嘱す。或は因縁ありて重ねて至らば、為に唐を翻じて梵と為して附し來れ。某願それがしわくは受持じゆぢせんと。屢屢手を握りて叮嘱す。詳らかにするに、其の南印土には多く竜樹りゆうじゆの宗見しゆうけんを行ずる故に此の流布りゆうふを願うこと有るなり」と。菩提心義の三に云く、「一行和上いぢやうわじやうは元是れ天台一行三昧いぢやうさんまいの禪師なり。能く天台円満えんまんの宗趣しゆうしゆを得たり。故に凡そ説く所の文言もんげん・義理ぎり、動もすれば天台に合す。不空三蔵の門人含光、天竺に帰るの日、天竺の僧問わく、伝え聞く彼の国に天台の教有り。理致須もちゆ可べくば翻譯して此の方に將來せん」と云云。此の三蔵の旨も亦天台に合す。今或る阿闍梨あじやりの云く、真言を学せんと欲せば先ず共に天台を学せよ。而して門人皆囁いる云云。

問うて云く、花嚴經に一念三千を明かすや。答えて云く、「心仏及衆生」等云云。止觀の一に云く、「此

の一念の心は縦ならず横ならず不可思議なり。但己のみ爾るに非ず、仏及び衆生も亦復是の如し。花  
 嚴に云く、心と仏と及び衆生と是の三差別無しと。当に知るべし、己心に一切の法を具することを「文。  
 弘の一に云く、「花嚴より下は引きて理の齊きことを証す。故に花嚴に初住の心を歎じて云く、心の如く  
 仏も亦爾なり。仏の如く衆生も然なり。心と仏と及び衆生と是の三差別無し。諸仏は悉く一切心に従い  
 て転ずと了知したまえり。若し能く是の如く解すれば、彼の人真に仏を見たてまつる。身も亦是れ心に  
 非ず。心も亦是れ身に非ず。一切仏事を作すこと自在にして未曾有なり。若し人、三世一切の仏を知ら  
 んと欲求せば、応に是の如き觀を作すべし。心諸の如来を造すと。若し今家の諸の円文の意無くんば、  
 彼の經の偈の旨、理として実<sup>じつ</sup>に消<sup>け</sup>し難<sup>がた</sup>からん」。

小乘 四阿含經

三藏教——心生の六界 心具の六界を明かさず

大乘

通教——心生の六界 亦心具を明かさず

別教——心生の十界 心具の十界を明かさず

——思議の十界 爾前・花嚴等の円

円教——不思議の十界互具

——法花の円